

富山紀談

日購	種類	函番號	上	號
日入	別		國	
		3347		號

919.5
338
Vol. 3

常山紀談卷之三目次

- 一 中嶋元行ナカニ モトユキが母備中經シネヤノ山城ヤマシロをちうる事
- 一 石川數正カズナ アサフカ浅岡某ミタガタと鞆タチの諸フは結ハタハタび様マコトを習ナラふ事
- 一 東照宮三河國イヒヂマツ一宮城イヒヂマツ御後卷ヨウゴクの事
- 一 三好松永ミヨシ ナガル光源院義輝ヨシヘル朝アソブたと弑スルさうる事
- 二 三好実休ミツヲ シュウ戦死センシの事 附ミツタタ光忠カツチの刀タタケけ事
- 一 浦ウラ兵部功名エイボウメイメイの事
- 一一 中村新吉ナガタケ永原安藝守アキノリ一騎イツキ打タマけ事
- 一一 北條綱成ダリナギ地チ黄イエ八幡ハチバンの旗ハタを捨スルる事
- 一一 柴田勝家カミタタケル水缸ワカルを破ハバクて城シロを守マテる事
- 一一 勝家先陣セニナリの将マサニとなくす事

坪内某料理の事

大沢左衛門が手の者ども 東照宮を窺ひ奉^{アリ}一事

清洲にて 東照宮信長公御對面の事

信長公伊勢は國司を亡^{トシ}一^{トシ}事

大久保忠隣功名の事

高木主水村越与三左兵^{シガキ}後殿の事

太田下野識鑑の事

北条丹後指物^{モノ}の事

浅井長政齊藤龍興と軍の事

丸毛兵庫助軍配の事

馬塙義濃守今河の皴^{タヌキ}を焼く事

太友義鎮肥前國退^{タク}口の事

信長公 東照宮小為朝の鎌^{ヤハタ}を進^{スル}セレ一事

姉川合戦の事

同柳原二の子功名け事

三井角右兵^{イケヤウ}生源平右兵^{ヤマツチ}功名穿鑿^{セニヤフ}の事

金松弥五左兵^{ヤハタ}物見の事

信長公朝倉を擊^{ウヒ}一事

長野信濃守上肥國箕輪城を守る事

箕形原合戦せ事

同信玄遠謀の事

同 東照宮御退^{タク}口^{ウチ}事

同 豊原宮傳

其後累合源九年

久神計舉守伊豫國美濃郡と事

有田大助會と翠とひと事

佐々木良忠と事

元和五年五月改定本の事

元和五年五月改定本の事

元和五年五月改定本の事

元和五年五月改定本の事

元和五年五月改定本の事

常山紀談卷之三

備前國 湯淺新兵衛元禎輯錄

○尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀後河兵一万をそくと備中
経山の城を攻させし此はハ中鳴加賀ちが子大炊助元行がち
然たり元行僅少二百計の兵もれもちやりと忍まば頤宮

治即左馬鷲毛九市二郎と百姓ぞく二百人そて寺屋を

よかく坐り伏むと阿部左馬二市撫見五市湯ハ鬼ヶ城と云ふ
よかく坐り敵侮もあらずすと對向を冥々とて出相因

る貝をふりバ鬼ヶ城の伏兵後よりあり又頤文木百姓
席旗と立まば竹鎗抜もせず閑のをあぐニ尼子が兵

兵を前後と敵前とて助け合ふとまども道細く谷ゆ

たるをもとめて、それよりされども攻具を設やすらかとみしに
元行が母物の具は上と羽舟を乞ひ刀を授へて女房二十人計
わき一え行本丸ある時ハ母本丸を巡てえ行出丸を巡まハ母
本丸をちりて士卒の台心を戒む或夜風甚しきればえ行
百人計にて表討おほせ出半をすと伏置おちかくて乱ま入閑
火声うちあ火をかけと静小引く返まえと敵追来まバ
よしめ往みよのかへより伏兵どうと起きて敵三百餘おほうら取
りえ行おほ防ごれと尼子は軍引ひきて復攻おもる事こと
アタリ

○東照宮今川氏高と伴不快の事起おこて勇いのて後のまゝ
三郎君さぶ君じんをもとて唯一人駿府スミもむかへからぬと今川家代
侍大將務ウド勤セキ子二人生イシれ氏真フササギをもとて若君わづか君じんをもとて
葬外祖セキ刑部ケイ大輔ダブと相あり若君わづか君じんを也アリとハ務

殿カミが子こをもとてせんと厚アツも氏ハシの收アシてやぐて若君わづか君じんをもとて
矣ハシは數正肩カタ小セシのせナ岡カ候マサニ帰カアリカバ侍家人ハシマよマや及
ぶ國中シラナウ貴賤キゼン浮ハラひよ高カシマつどカシマて蒸カシマせぬものカシマをな
くもと三方原合戦カタハラの時數正ハ信長カタハラ加勢カセト遠エ列キ
向カタハラひきカタハラ武田カタハラがカタハラすと多カタハラと多くて義濃シヨウコ護土岐トキ
家カタハラと淺カタハラの某カタハラ弓カタハラをもとてくわへぬハセ兵カタハラと聞カタハラえ

トウバ彼が許モキ此度カタマリ本國カタマリニヨリあバあうち死カミス
數正弓箭カタマリをもつて打物カタマリかくみとく軍カタマリあつま半度イナヒ
をうつたども軍カタマリに附むの日難カタマリは終カタマリむとくへ孫カタマリ故カタマリ實カタマリの事
とありくらまご学カタマリひりづはれば死後カタマリ難カタマリ比緒カタマリこせく骨法志
うをくらとがれたて笑カタマリひなんす岩カタマリの上カタマリ恥辱カタマリとくにハ
教カタマリを奉カタマリアダコシモテ賜カタマリひ傳カタマリへ夜カタマリを日カタマリつだて地カタマリ下カタマリア味方
宗カタマリの軍カタマリも計カタマリもとれて武勇カタマリをふるひうそと其カタマリ後カタマリ太閤カタマリ小
欺カタマリも園カタマリ崎カタマリ城カタマリを出カタマリて上方カタマリに登カタマリり豊カタマリ長カタマリ家カタマリ奉公カタマリと太閤カタマリ和
泉カタマリをあくカタマリへ武者カタマリ奉行カタマリを命カタマリさくられぬ數正カタマリ徳川カタマリ家累カタマリ代カタマリの君
恩カタマリは叛カタマリき一生カタマリの功カタマリを空カタマリとカタマリして血氣カタマリ既カタマリ衰カタマリふ時
と是カタマリを戒カタマリ事カタマリ得カタマリうらとどる聖人セイジン教言カタマリもとおりカタマリを

こうじておそれ

○東照宮三河のミカハ一^{イチ}丈^{シヤウ}丈^{シヤウ}城カタマリキタキタスニカタマリ
キム永禄七年五月今川氏真ウツサキ二万作の兵を以てかくまれるを
其カタマリ中八千兵カタマリ引立カタマリ武田信虎カタマリと大内カタマリと後卷の防カタマリ
せせしの東照カタマリまかくと竪カタマリ一召カタマリよし左カタマリ一騎カタマリがけよ地カタマリ
ウシ生カタマリアソビとぞうり敵カタマリハ味方カタマリ比カタマリすとバ十倍カタマリもあくん
殊カタマリ信虎カタマリハゆゆと勇將カタマリよひと老臣カタマリとも速カタマリまれともせ理カタマリハ存
をうく人カタマリはまだ人カタマリハ卑カタマリ賤カタマリよもよしし信義カタマリのニツよよそそ
うそそ身カタマリをまつたなしひかれ敵カタマリの城攻カタマリササギヤテ大軍カタマリまわれ
をハさむりんを既カタマリ味方カタマリを入カタマリきて今カタマリ敵カタマリ大軍カタマリまわれ
とて遂カタマリくべきや主カタマリの大軍カタマリハ役者カタマリが救カタマリ役者カタマリが危難カタマリハ主カタマリの

まへと弓矢をよし道あり今ハ後清オサリ屍戦場暴
き大将ヲ取此殿の所為ハイのちをすてん事もあら計也
惜かレトといまみもじ其勢よりて二千計の兵にてはア
ミ打向ハセうひ信虎の八千人ひくそはよそユ足てア述
ふ城きハイも一つあまく城中をひ悦ぶ半限ナリ氏真
リバヤ方を取田で一人もあらずと付と評定せし共
間 東照宮ハ百助を召具レシヒ城を出でシモキテ
百助今も仕残ハ身モかけくもびもべくいとく手の者四百餘
をもく信虎の軍モかけ金セ打破アリ利を得アリ酒井左衛
門尉忠次石川伯耆モ教ム牧野右馬允康成ハ後殿トモモ追

かくほどもハ忽切くづモヒニ色あふもて又ふれを
氏真も進ミ得モ 東照宮事れく帰陣せし物矣アリ
以ニ二歳れ侍時たり

○永禄八年三好義継松永久秀大和何内ヨリ京入五月
十九日辰の刻光源院殿北館をかくみ乱ま入られバ防ぐ者
ども或ハ討れ或ハ自害モ沼田上野メと福阿弥ヒタガ敵の
相ぞト竹槍を腰モ挿て外ヨリヤクヅレ入光源院殿の侍
前ヨリアリヨれホ二人を始ムく防ざる仕りテソビト戰ひ
人其間ヨリ日比愛せし勢ヨリ早足の拂馬モ召群東川京モカ
ヒカモセたゞド拂運をひくセ給ふベキと浪を流レヤルレバ
志忠義の志非等モ申つゞされども汝等討死シテ望

残てひよれをきやとてゑく防戦ひく遂に自害する
其きは

六月雨ハ重き流りやくにこら名をうなよむれ上すて
自ら筆を把て書あへうひりとて光源院殿の弟よ鹿苑
寺の周嵩とり有る者、一ダ平田和泉ちとり若迎に遣て北山より
出立て付とくに供セテ十三四の童忽にかの平田が
詩とくられバ世は人やめりへ

是釋の義俊光源院殿を追善和歌は序よどて扶桑
拾葉よどもうちはれども童の名ともばほ信長記と
此人姓をもせり小川の住人美濃屋小四郎とて容
貞世と傳まつて供もくし此變よあひて三条吉則の刀

を抽て和泉が首を打落すすむじ若五六人切安
て腹切て死セドリニ

C 三好修理大夫長慶ハ細川攢收守持隆の子アリ三好ハ其先甲
斐の源氏小笠系の族少く信州に住セタゲ三好長房は阿波
守護とく世々阿波を京都に攻す細川晴元一代で
五畿内の本を執る等二代豊後守之長と称す其弟安
宅按侍冬康其弟十河一存とて天文二十一年実休持隆
を弑し其後室姫已が妾とて惡逆を恣ふに永禄五年佐
木義弼を攻上アリバ万松院敷ハ八幡に在て防主富
山尾張守高政佐木トム一紀別おり泉州にうちをふ
より実休阿波より後海に岸和田の東久米田一陣を久米田

寺小橋諸兄公の墓ツカ りり 実休墓体堀石の擲タロイシ ナリ
人眉ヒメイ をひそめどりすかへ 三月五日高政兵スシ をとくら先
陳チ を額ヒツ が原ハラ がむしん 実休山上よりとおもて、自サ ま先ヤシ 進
で高政タガタ が先陈チ を打破ハサハサ 了 榆木山ヨクキヤマ 伏フセ かまつる 改ハシ の兵ヒ が 根
来法師ホウジ 相加アヒタ と不ハシ えハシ 切カツ てから 三木内ミキタケミイチバン 匹コシ 一一番イチバン 僮ハシ 陰ハシ を食エ せ 実
休タケミ が先陈チ 敗北ハシタク とくり 実休タケミ が将机シヨウキ と腰ハシ うけて引ハシ た者ハシ と下ハシ
ト散ハシ し 独ハシ ひめハシ とわく討ハシ まハシ ふ 実休タケミ が根ハシ 未ハシ 左ハシ 京ハシ すと
アモリアモリ 改大利ハシタリ を得河内ハシタタケニ と入ハシ 此時長ハシ 茂ハシ が義ハシ り
飯盛ハシタタケニ の城ハシタタケニ をかこみ攻ハシ 了冬ハシタタケニ 康兄ハシタタケニ の吊軍ハシタタケニ を志ハシ 且長慶ハシタタケニ を救ハシ
人ハシタタケニ 为ハシタタケニ 岸ハシタタケニ 和田ハシタタケニ を打ハシ 出ハシ す改ハシ と森井寺ハシタタケニ 南葉ハシタタケニ に降ハシ まハシ すと 実
アモリアモリ 康勝利ハシタタケニ をねづり 実休タケミ 討死ハシタタケニ 刀ハシタタケニ 光忠ハシタタケニ う作ハシ 也信長光

忠ハシタタケニ が刀ハシタタケニ を好ハシタタケニ 二十五腰ハシタタケニ すと集ハシタタケニ られハシタタケニ が壊ハシタタケニ て弟ハシタタケニ の好事ハシタタケニ 木津金
とハシタタケニ 商ハシタタケニ あハシタタケニ かの光忠ハシタタケニ の刀ハシタタケニ が残ハシタタケニ らば足ハシタタケニ せて此中ハシタタケニ 実休タケミ 先忠ハシタタケニ
有ハシタタケニ と向ハシタタケニ ふ一腰ハシタタケニ やう出ハシ て是ハシタタケニ なハシタタケニ とハシタタケニ 信長ハシタタケニ 仁ハシタタケニ と
よハシタタケニ やと向ハシタタケニ 小切先ハシタタケニ の少缺ハシタタケニ ては 実休タケミ 打死ハシタタケニ の時根ハシタタケニ 未ハシタタケニ と
勿ハシタタケニ らまハシタタケニ 小脇ハシタタケニ あハシタタケニ ありてかたハシタタケニ とおひひとやされハシタタケニ は伝ハシタタケニ
よくあハシタタケニ うとハシタタケニ それハシタタケニ とハシタタケニ

実休タケミ 討死ハシタタケニ 时長慶ハシタタケニ が飯盛ハシタタケニ と連歌ハシタタケニ と告來ハシタタケニ すと
きよすハシタタケニ は芦ハシタタケニ の一ハシタタケニ もハシタタケニ とハシタタケニ 句人ハシタタケニ 附ハシタタケニ ひハシタタケニ ふ丈
書ハシタタケニ と披ハシタタケニ てとハシタタケニ と附終ハシタタケニ て はて 実休タケミ 打死ハシタタケニ と告來ハシタタケニ すと
連奇ハシタタケニ えハシタタケニ て止ハシタタケニ と さて 兵ヒ を出ハシ されハシ とあり

信長都^{シナカミヨ}一攻上^{アシテ}小及^スて松永^ハ降^{コウサン}系^ス—三好^{もと}もぢ^{モシ}が養嗣^{ヤウシヨシス}義継^{ヨシジ}
ハ河内^{シマツ}にて自害^{ジガイ}—三好^の家滅亡^{スバウ}せり

一說実休^ハ泉州岸^{セニワタケ}和田^ノ安宅^{アタカ}攝津守^フ冬康^{ヒタチ}と^ス之^{アリ}先
より畠山高政^ハ紀伊國廣浦^{ヒロウラ}と^ソ所^ス流落^{リウラク}の体^{タタキ}なししが
熊野根来寺^ハ法師^{ホウ}を^カり僅^{モヨ}一岸^{キシ}和田^{ハタ}へ^シと^ス之^{アリ}実休
後卷^{セシム}と^スて波濤^{トカイ}一塊^{サカモ}の津^ツと^ス勢^{セイ}拵^シせり^ス高政^{ホウ}和田^{ハタ}
攻^ムんと^ス兵^ヲ城^ノ上^ル引^リと^ス城^ヲ又^シあら^ト、
四國^{シコク}の兵^ハ篠原^{シハラ}右京^{ナガト}進長房^{シナガハシ}一宮長門守^{ナガトノミコト}成助^{ナガシタ}木^シ和田^{ハタ}
手^シ小阵^{モト}—実休^旗本^ハ久米田^{スカミタ}と^ス高政^ゲ陣^{アリ}を^アんで^ス高政^ゲ陣^{アリ}を^アんで^ス政
ハ東^シを^シ引退^スくと^ス遠^シ遥^シ爰^シ來^スて討^メも^シさんす
口^キ惱^シ死^キたり山上^{アマツシマツ}へ^シか^クて一^ツ殊^モも^ア生^メも^アと^ス下^ル

主^{シテ}と^ス揆^ハ別^ハ高^{タカ}櫻^{サクラ}の城^シ主^シ入江^{イリエ}左近^{サコン}大夫^{ホトトギス}塩田^{シオタ}采女^{モモコ}二人^ニ京^{ヨリ}
北使^{シカク}と^ス來^ア居^リ敵^を小^コ勢^{セイ}あ^リと^スて左の^{シロヒノ}今^シ
今^シ已^シの時^ハ高政^ハ軍配^{シカイ}よ^リ味方^{ミカタ}の為^シハ大^{タケシマ}山^{アリ}か^リ唯^シ今^シが
う^シバ十^シ十^シ敗^{ハサウ}小^コ兵^{シカイ}一^シ晬^{ヒツ}時^ト移^ス一^シ手^シと^スく
あ^シひ^シか^ク午^ハ時^シ小及^スて軍^をす^シり^スう又^シ敵^を南^シ山^{アリ}へ^シび^シ
出^シま^シ此^シ二^ツの間^{シテ}と^スと^スバ実休^心安^シれ^ス時^ト過^スバ敵^小
利^シ育^ベ一切^カり^ス巴^{ハタ}と^スち^シ山^を尾^シ傳^ヒ一^シ東^シか^クと^ス
を^シ左^シち^シく^シ巴^{ハタ}南^シ下^ル右^シ北^シ尾^シと^ス一^シベー入江^{イリエ}塩田^{シオタ}二^手
小^シ兵^{シカイ}少^シれ^バ條^{シハラ}原^{ハタケ}は^シと^ス人^を打^ツま^スて^ス伏^シ小^シな^シま^ス一^シ
高政^{シマツ}夢^{シカク}少^シか^クと^スて東北^{ミナミ}の道^ト出^シなん^と伏^シけ^ス討^メ、安^ス
里^{シマツ}の^シ高政^{シマツ}物見^シを^シ出^シて^ス足付^シを^シどな^シバ南^シの山^を登^ス

横合ヨコ合、突ツキかられよ高政ハ籠中コクチウトリの鳥也とて二人の詞コトバを用ひて
入江等東北の山ヤマハ進アシテて彷彿ボクシテす実休ミタケハ條原ヒラが兵ヒサギとも
て高政を誘アビカせし小長房コガツサにそりて進アシテゆく上の山ヤマ
根来法師成田玄齋ネコロホウジオシタクンサイ雜賀孫市サカノコトヲカ左シナガへ
まゝりて功シテかり偽シテ故バを一時クダル決スルを阿讚淡アサンタニ國シナガ
兵ヒサギを引アキ後アフタ一歩ヒラあくはうドウカアシテ実休ミタケをうちわアシテバ
少シテ死スルモベーと之シバ孫市子細シサイや及ふとて山ヤマを下アシテ立スル
ま一文字イチモジ実休旗ミタケ車カミより忽實休ミタケを餓アシテアゲアゲテ
討シテとくとく陸シマ四シテオハ敵アシテをとどんアシテざねばアシテとぞい物見シテ
をとどくとアシテ小実休討ミタケ死スルを告アシテすさアシテばアシテ政マサニ陣ジン切スルて入アシテ討シテ
サアシテとアシテかげ向アシテひかアシテるアシテ猿サル小アシテのアシテ教シテをかどアシテ受シテ塩田シマツダも討シテ

死スルれアシテばアシテぬアシテも堤シマをさアシテて敗アシテ北アシテりアシテれ永禄五年
○財主シマツ壬戌三月五日久采田合戦カツセイにて実休ミタケ三十六策ミツロクたゞアシテとくとく
つ毛利元就豊前モリタケル司シテの城シマツれかアシテみアシテとアシテてアシテ引アシテ出アシテされアシテ時大友宗麟オホトモシカニ
乃士大将瀧田民部タキタミンブ只アシテ一勝波シマツ陸シマツあぐアシテ瀧田タキタを討シテとて帰アシテ遠アシテ
浦ウラ兵ヒサギ宗鶴ムネカツ船ボウをさアシテりアシテ陸シマツあぐアシテ瀧田タキタを討シテとて帰アシテ遠アシテ
く是アシテとアシテ人ヒト誰アシテとアシテえ能アシテ只アシテ一人ヒト陸シマツあぐアシテ巴タカハ
兵ヒサギをアシテとアシテとアシテ歸アシテとアシテとアシテ物モノの具ツブをアシテとアシテ又定アシテ
アリアシテ了アシテ得アシテとアシテもなアシテく瀧田タキタを討シテ対アシテ人ヒトは滄アシテをアシテとアシテせアシテりアシテ
○佐木サキと三好ミヨシと軍ヒサギを佐木サキハ亂タヌキ陣ジン一三好ミヨシハ赤山アカヤマと三好使サキ
以アシテ中村新シムラ嘉カとアシテ岡カウの者ヒトらアシテまアシテとアシテりん人ヒトあアシテばアシテ出アシテこアシテまアシテよ

人をもせで戦ハせんとひへば佐木内と江州とかれあ

き永原安藝守とりおをもぐり出に修定ち村石地産のあ

よ出あひく永系ハ直義中村ハ十文字比鎧より散小武いりう

永系を突伏首をとも中村ハ近江國の人なり一日、滝を食す
年十七度首四十級を得て有氣代世々中村と称す

永原とは、とて時室町將軍靈陽院殿義昭江別矢鳴

是をすて感状小朱塗比物の具、朱柄比鎧をして被る

ひそれどつて一説、お別を半分領して松山移り士を

唐冠金纓の胄をまとうといふ

○相模の深澤は軍小北条家の先陣は大将小条左衛門大夫綱
成敗北とて旗をひろひ取て後まづ信玄劣て逃

走てまことに棄て小逃ト必地利をもとて戦を心がけま
らん旗を棄て旗の面をうへておこらへまじてま
田一徳斎が赤子は源次郎と左衛門大夫が武勇よりやうれとてかの
旗をあくられたり練緒三幅くちゑ地黄にて八幡くじニ
字を染て世よ地黄八幡とて左衛門大夫

かくとは、とて伝玄比肩く恥辱を雪くと悦びて乞伝玄
遠き慮ありてかくはりしれとて左衛門大夫比すぞれ
しる勇敢あられば嘆くことすて必死の軍すまなむ

其鋒支がりと察せまきて其憤を發せん爲とぞ

○永禄十二年佐木承楨柴田勝家がやまほの長光寺の城をか
みて攻め遂に物懲りを打破し猪木車丸よみて三支をすと防

戦ふ郷民佐木がはよりみて此城ハ水の手遠く遙あす所より
水をうねるきをうり切ひ徑あバ城ハ保つべからと告あと
され、兼複悦て水の手をうり切ひり跡中も困めどもこれ
をうりハさば歴夜、れをアソん爲る和平せんとて平井を
外を使ひて城中に入り平井勝家と對面し手水を清糸
水をうちと小性あんしてかき出しこれ平井手を洗ひ
小性残まらず水を庭にすこすこ平井湯でかくとぞバ事のたゞひ
くらあらやノとあへりかくて城中既に水竭られバ勝家皆
汗くぬ切死せんとて諸士をあつそまむの酒宴と残ます
水を向へバ二斛計入をき缸をかきかとば此間の渴とす
よみて人び汲のまされ、勝家眉尖刀石づきうそ缸
碎くうり夜明方よ門を定めて出る佐木とひもよりんべ大ふ
敗北一ノ月バ勝家首八百餘級を得て岐阜小献ば勝家が移
長光寺うり信長感状をうり賞せり事大方なまべ
是より猪家を起りて柴田と世小称一ノ月
○信長勝家をもて先陣の大将とて猪家固く辞をまどひ承
三月ひくほ仰と兼アヌとて退出する时安土の城下にて信長旗
車のすゝ遭ふるにあひて勝家無礼をせめて遂に却て
よそへりされバ信長怒られりて其時猪家禮でやううされ
ばこそ先陣をバ是非とも辞りてまことに細たうて辭べ
まや先陣の大將者威權なた時ハ下知引ひまざる地を
うまとつて伝長詞たゞうり

○三好家滅一時料理庵下の上手と多々一坪内傍だりて

者生どうとかうと放一囚少くも一ト年裡ては菅谷九左衛

門賄ナリ市原五左衛坪内ハ鶴鯉庵下ハ云ニモ及ばず

七五三の食膳の儀式よくあれ老なうす上子ども兩人ハ既に

奉公ヤハベゆきれひて厨の事を取らセヤシノヒシヒト伝承

サテの野が料理ナセト其塩梅より人となう一ハ則坪内

をもて膳を出セリミ成信長食して水くあきてくねざるよ

それ殊せよと怒シテハ坪内畏承し今一度仕入され

もほんと應接せば腹切んと之ハ信長許客せまくさとてその

羽音日膳を出シタゞ小味スナキナキ本味の如シトナリ信

長悦て禄あぐられ至坪内辱シセシテハくわび付邊拂ハ

三好家の風うりもとれ塩梅ハ第ニ番の邊拂あり三好家ハ長

輝ナリ五代公方家の事とく日本國の政をどうもくみひめられ

何事もソヤレバ其好サヌ第一等付塩梅を時々キツマハ

半身も事ことこうちあそびされ風味ハ跡鄙あるあか風味

ハハきくろ入とくとくとひなればアハ人信長と恥辱をあ
えず坪内が詞へとソヒテ

○永禄十二年四月 東照宮濱松ノ時

あまハ今川氏真を武田信玄攻落一氏まゝの山家引

らりうと東照宮父義元のトミミサムシ遠江とハ徳

川家ナリをひじ一信玄ニシテ信玄と軍をもと

ナリハ小田原と相もとて両旗ヨリ信玄と軍をもと

氏まゝ仰せられ、バあゆにて掛川の城を徳川家に譲り、
氏政信玄薩埵山にて對陣。只之近せり合有。東照宮の先は
援河へ攻入。山縣三郎を圍みを追がく。ノル風は信玄前後ア
やうとされく勝利有す。トを計て甲別へ兵を遣され

きゆゑ 東照宮も帰歸陳あり

堀川ノ城を打退させまつ時大澤左衛門尉

あま下りお永禄十一年 東照宮遠江を過半治め
一時降参一時もれなし

がよれ老ぐも去年よりもよき面々相計。而尾張主膳
村山修理あ人と大將として堀川よりそに一揆をかゝへ通らセ
キを待ふりく付まんともく一揆ふそれともく一揆す

一揆七騎もすれ過させうひな一揆どもうやトニ騎馬のざる
クレカカモニモ其あく石川伯耆守数に通りくると
及てはてハ先に通らセケルニやまやまく付だき物をと悔ミ
シテ創業の人君天子佑あり。トと竟へりせば堀川の
一揆を攻らし小此城湖のゆゑに附ハ船の出入自由ある
おも引取る。唯一方口北城うち一ヶ所落べき。となくて皆討
せましや

○永禄十二年尾張の清洲にて 東照宮信長は始て佛對面
時他の刀持士武昌吉とあくまで植村庄左衛家改佛刀を
持く通らんとすとまともおとがひまば徳川家の士と誰が下
わふく止みとひすとむだとほり佛前は白羽をまくと

信長又く何考をと問ふ　東照えみとが士とていと答へよ

長柄村ハすよ勇士ニ今日の今ハ大事ニ犯べ心安りとべーあつ

ましよた士らす、ひども威ざれりサ壯志也、復出羽ちとソ

○永禄十二年信長伊勢の國司小畠中納言具教を大河内の城

攻ス數月経て株強くしてちとんひすやび信長織田掃除兵を使

ふして信雄を以て具教子子具房の養子として和平を保ト

いじせられバ人質を少々と回して和平事ならぬ信長岐

阜ニ序エ二男茶夷丸十二歳ナリレジ士らす、はとて伊勢カ

大河内ムシテ國司上尉面ノ船江ニ行ク具教ハ世を具房ニ譲

マテ三瀬とツバニ閑居せられバ尚信長小宵く志ありリモバ

信長國可れ家の老だとかく、ひ天正四年十一月廿五日ニ承

て弑スあり且六房ハ信雄の養父られバ河内よりこみて至る

が天正十六年一死去せ、元祖親房卿とて且六房ムシテ十世ニ及ぶ

とくん具教の弟南都東門院に住候ありとくも且六教弑せま

キモチウモ教をちて伊賀上赴た還俗して北畠具親と称

ミツセ三瀬河股多藝小梨の諸士をかうらひ仇を抜きんとされ

利なくして中國ニ流落、毛利家をものと備後北朝ニ

居テクモナカ具六教兵を起テ天正六年信雄の兵、波瀬奉れ

城を攻め、六呂木山副波瀬三郎以テ三人を生ごうされ

ば死罪不一ぶきと浅せまゝ、三郎が容難せうされバ

信雄坐すくらじとつまつて三郎が容難せうされバ

又相同一二人死レバ一人生れ、三郎が容難せうされ

らまじへとよ二入ハ年老ぬ情もどき身よ非ぞ三郎ハ仰よ從
ひへとすれども入も遂ユ三人亡モ碑ユからむ財ユ三人
君の侍為ヨ命をもつる事士のとひ出面目をもつてキサ
とて謳をうひ物語レバ誅せられリ三郎此時十五歳キ
まぬ人たゞり一とりより王井新近席とり者具心を合せ
信雄ヨ背トガ父兵部サ浦と母ともよ祚戸ヨがれ居ト
搜出レテ柳田河ゑとて礎ユセムニ無教サ浦子の新近席を
呼て汝今度君の侍仇を報少畠北家を興んと志タム
士カ本志五口生前の大業孟とくみ水を乞て父子二人盃とくみ
かハム其後殺ヨリとぞ織田家は刑罚仁者の道アモ
其暴逆終を令せらる事をことじうたり

○永禄十二年今川氏真遠州掛川の城没落比时天王山カ
合戦大久保治右衛門忠佐敵をつ伏物の新十郎忠隣ニサ
首タリテ功名ニせよと呼うされバ忠隣十七歳ナシが
人のこれと首行ようすじきとて敵せかようすりて首をとる
笠形原とて諸軍散乱レバ東照宮にほたまゝ人少カ
アリテ沛例をなれまばは歩立マテ沛供レムを小栗忠
藏敵乃馬を下り来てそれよ兼まと仰まく其うを無て
沛供ヤタリ後相模守トキサハ此人ナリ

○遠州との事なり。づまに時の軍トヤ東照宮の沛内
ミ高木主水清秀村越与三左衛門とてすゆ兵二人味方小栗
キ細ナリてをあぐと引退くます敵十騎計追來す木

鎗ありて一足も引かずたゞと呼ぶ村越弓弓をつゝ
槍をましを射ん心ばく鎗をせよとひくれば敵をすむをす
人又リ退くかくも事數度ふ及ばずかくて左右沼もく一弱
うちれ地となりてうそどりてふとりつらじまし高木ぬ
笛を先からて敵をつゝ伏きバ村越大音あげ其首され
りすに敵一人射傷モ敵ひも下を高木ほく進で又一人つき
伏きバ村越も又一人射倒てすまドリ追ばれバ心あづふ引
やまく

音清秀ハ水野下野ち信元も属せ一時三州薺屋の歴も度も功
名らゝ後 德川家も仕水野も属せ一時石ヶ瀬とりふて
二河の兵と槍を合す年一日も七度石川佐者ち十七年

○卷之内記とひしが五名のりと鎗を合せねりもすり
是長久手比軍もハ清秀内森四郎左衛武者奉行より死
清秀もそのは関がゑ比附隠居せりが豊州小山へ年くられ
度も功名を仰らま 台徳院殿綿の赤羽折を顯ハ
アラシトサ戦國の時も一日も數度せ槍ハ罕もすり
高天神小笠景興八郎が士林平六郎遠州豆大寺とて六文
鎗を合せ信玄伊豆蓮山を放火一山縣をかほくと金も
小塔兵すてお門より口ヨニ向れ浪人河村侍兵の傍白四方
ス船れ字の仇あく敵を追ちる一槍を合す事一
日少六度といふアリ

○太田三樂が内より太田下野とソツ士よく人を識る其のたゞが
ミモツケ

一ノバ三樂いれぬ故にと向 下野別の子細もいじだまとバ連歌
ちる者の古歌を竟りハシが連歌也益よせんもかく士の功名を
志す者も又志すなり其人を比喩ぬやうりく あふるべ十
小八九ハまがひりのものたりとぞ答ひ

○北条丹後一尺四方白練^{ヨシネリ}と黒き蟻^{アリ}を繪^エ小書て指物^{サシモノ}ある
を謙信^{ケンシン}にて汝^ナがさへわらうと小きハいも子細^{コト}と問
又丹後^{ミコト}味方^{カタ}トハ尼^{アマ}をもがくくいべーはハづれども進む
先づけ^{キツヅ}退くよしも後殿^{シニガリ}せん^ス他人の大あく指物^{ココシハシ}
と敵の凡^タ無^ナハ固^クく存^スたうとヤセ^シ謙信^{ケンシン}と云う
なりとぞれ

○浅井備前守長政王潤川をかぎりて齋藤龍興と軍にゆ

時長政五百計の兵をすゞ^{シテ}関原野上^{アヒ}宿^ス小火をかげ^{シテ}浅井の
前^{アヘ}ある小川小柵の木^のひく待^テりて^{シテ}竜興一萬計^{ヒサシ}を出^スと
長政^{シテ}百人計^{ヒサシ}を菩提^{ボタ}の徑^{ヨリ}敵の後^{ハシ}ま^{ハシ}セ自四百計
を以て敵のもとを夜討^{シテ}あらま^{シテ}徑^{ヨリ}の兵もとを菜
アモヒモト^{シテ}み西より^{シテ}聞^シの声をらび^{シテ}バ龍興内通^{ナシヅカ}の者ある
よも思ひらばて^{シテ}岐阜^{ギフ}よひをとせん長政大垣^{ホリ}のを^{シテ}呼^シくよ火を
かけ^{シテ}せられバ龍興敵勝^{シテ}棄て大垣を攻^シた^シいざります
よとて岐阜を出^シ一ノバ長政や^{シテ}引^シそと^{シテ}足^シの物^{アシガル}あれ
を三十人^{タルチ}浅井^{ヒヤウラ}土民^{ドミン}の家^{シテ}かく^{シテ}アリ^{シテ}龍興^{ナシヅカ}入^シて士卒
も^シ渡^シ一ノバ無^ナ糧^ヲつておもて^{シテ}かく^{シテ}足^シも^シ足^シも^シ

少うち破ハシミヤゲで南宮山ナシダニ小臺コウテイまで敵を下り龍興リョウキョウニ度スルまで
敗ハシハ一ロヒコを下シタくもて四面をそりとてあすまびうへんともひま
ひづり長政ナガミにて歎ハヤハ大軍あり十死一生の戦ツバメトハ是之シテなまが
己ハシ下シタかき肉ヒハ箭ヤの一筋ヒも射ヘクベクヒにとししく攻ムカシムを待マサニ
山サン上アツより一文字ヒ大切タケルかまハシバ竜興リョウキョウ大小敗軍ハシタク一ヒトトヨ
長政ナガミを恐マジとして復軍ハシタク事ヒ無ナシタリ

○丸毛兵庫助長住マルモヒラコスヂナガミ其子三郎丘ミツラコ長隆ナガタカ竜興リョウキョウ小奉公コウコウして美濃ミノ
の多藝郡タキ大塚オホツカ城シよみヒ安名伊賀守アシナイガムシ氏家ウヂヘル常陸ヒタチ久能クニヤ良ヨシ小
叛ソキて大塚オホツカ小もヒコすヒ兵庫父子三百計大塚オホツカより一里リらすスり
出ヒて陳ミ一城近ヒ百姓老若男女ラウヤシナニヨをいそぎかり催モジホ一ヒタリタリ小
竹竿タケハシをもヒセ大軍ハシタクの作ハシタクよもヒれヒほひヒ氏家ウヂヤを轍ハシタ破ハシタリ

○久バ安藤アンドウも又施與シヨウ小降コウサキ一丸ヒコモ父子小祿コウロクを増ハシタク感
状ヒダをあくられハシタクリ

○信玄駿河シノザキ小攻入時アカル朝比奈兵潮アサヒナヒラシを始ハシタクて軍ヒすヒ若ヒく今
川氏真落ウチササギらヒがバ信玄シノザキとく今川カワの館カニ小池ヒラ行ハシタクて名物モノの寶ヒタチ
カカヒも奪ハシタクり来ハシタクまと下シタ知シタせシタ馬場美濃マハタチ氏房ウヂハシキ聞ヒタチもあ
へば唯ハシタク一猪鞭ヒツヒン小禮ヒラヒと合ハシタクて鉢ハチ小かけ入ハシタク火ヒをかけハシタク燒ハシタクもヒし
タヒと是之シテ宝物ヒタチども奪ハシタクとりと食ハシタク欲ヒの師ヒサグたりと嘲ハシタクれん事を
慮ハシタクアムヒなヒだ

○元龜元年の春大友左衛門督義鎮肥前ヒタチの龍造寺山城リョウゾウジ守
隆信タカラヒをうつ隆信和タカラヒハを乞ハシタク一丸ヒコ大友兵ヒタチを加ハシタクへ肥前ヒタチと筑後シドウ
久坂カハシ小千栗ヒカルといへ大川ヒタチあり吉岡下總ヒタチ入道宗觀ヒタチといつ者ヒタチ龍

造寺ハ大敵なり。傷負もわきまべ故あく和を乞一ハ謀あるべ
千栗をこころん事ぢやそりドとソヘ義鶴も尤ふりよて
豊後北留守小置^{オキ}佐伯紀伊守惟教其子深山^{コレサネ}智^{コレサネ}
田原近江入道招恩^{セウオン}を呼す六千の兵を二陣うへて千栗北
渡^{アリ}備へく川をこころ。隆信を坐じうりて敵の引退ん所
を不^フる^ト擊んと謀^トふ大友北設有事を^{シテ}退^カさ
となり

○元龜元年六月信長朝倉をうつく龍^{タラ}鼻^ナ小阵^ハ 東照
宮援兵の為廿四日江^{コウホク}山^{サン}小^{チヤクチヤン}序^{ヒヤウテウ}は評定^{ヒヤウテウ}の付信長鎧^{アマツシマツ}をお出
て此^{ナシ}餘^{ナシ}ハ鎮西八節^{ナシヒヨウ}北^{ヒタチ}旗^{ヒタチ}あり徳川殿ハ源氏^{ゲンジ}あまばすら
せし明日北軍^{ヒタチ}勝利^{ヒタチ}へとひき伏^{スル}事^{アリ}今テ北虎^{ヒタチ}の皮^{ヒタチ}あがむ

○の御繪是なり

○姉川の軍小信長ハ龍^{タラ}鼻^ナ山を左^{シテ}淺井長政^{シテ}向^カる
東照宮ハ^{タフ}鼻^ナを右^{シテ}朝倉^{タラ}二万ありり^ト向^カせ^シる時
小笠原興八郎^{ウチスケ}氏助^{ヒタチ}二千計先陣^{シテ}進^スで川を涉^ス氏助^{ヒタチ}兵^{ヒタチ}伏
木久内中山是^{ヒタチ}非^{ヒタチ}之助吉原又^{ヒタチ}勝林平六伊達興^{ヒタチ}宗御^{ヒタチ}門奈
左近^{ヒタチ}兵^{ヒタチ}渡^ス金大夫照^{ヒタチ}七人^{ヒタチ}槍^{ヒタチ}を合^スす中^{ヒタチ}少^{ヒタチ}渡^ス金^{ヒタチ}朱^{ヒタチ}
金^{ヒタチ}小^{ヒタチ}金^{ヒタチ}の短冊^{ヒタチ}十八枚^{ヒタチ}を^{シテ}ねを防^ガ一^{ヒタチ}堤^{ヒタチ}の上^{ヒタチ}と進^スむ信
長^{ヒタチ}て其^{ヒタチ}召^ス出^スて天下^{ヒタチ}に^{シテ}餘^{ナシ}たりと^{シテ}立^ス志^{ヒタチ}状^{ヒタチ}貞宗^{ヒタチ}の刀
を添^スて立^スう^トあ^ス六人^{ヒタチ}者^{ヒタチ}を^{シテ}憤^スて各^{ヒタチ}を^{シテ}しで鎧^{ヒタチ}を合^ス
一^{ヒタチ}も畠^{ヒタチ}の中^{ヒタチ}を^{シテ}立^スあ^スと^{シテ}からま^スひと^{シテ}ア^スレバ六人^{ヒタチ}た

信長感状をあくらま

(二)姉川少く酒井左衛尉忠次先陣より二陣ハ拂ふ康政^{マスニサ}へ酒井
を始小笠原与八郎菅沼新八郎奥平半川を涉てかゝり
岸高く上をかのこまゝ神原真一文字^{マサニチ}すすむひで上をがれ
峯を毎二岳三山ありあげよとあいとくとひくわあぐり
酒井が先少すまんとすまきてて酒井が兵あつれてハ毎念あうと
競^{キミ}がり利を得^テ 東照宮拂原^{マサニチ}のよせあく^{アカ}策
の手^テなく二元^{ツノ}もハからざるもくもくこと仰^テうと
C姉川の戦小坂井右近^{マサニチ}子久藏十六弟^{コキウナウ}と討死^{タマシ}て久藏^{マサニチ}ハナニの
時佐毛始^{マサニチ}と京に入^ル比^{コロ}近江小郡^{コロ}にて鎧を合せ^{マサニチ}了^{カウ}剛の老^テ
三井角右衛^{マサニチ}生瀬^{イシセ}平右衛^{マサニチ}二人とも久藏^{マサニチ}首を得^{マサニチ}とよ
二人後漢白秀^{マサニチ}次小仕へられば此事沙汰^{サタ}けりくニ井^{マサニチ}がつどり

たりとて鷹部屋小^{サカニ}をおきて罪^{ヨシ}行^{マサニチ}さんとく三井いめ
ち恵^{ヨシ}惜^シじ非^{アラ}じ人^ヒ功名^{コトニヤウ}を盜^{スル}る惡名^{アシマヤウ}の子孫^ヒ耳^{アリ}くやうん
事口^ヒをうされば今一度詮淺^{セニキ}くたすらうにへ證據^{シテ}、淺見^{マサニチ}と安土^{マサニチ}守れ
はつ^ヒと問^{マサニチ}かば実否^{シテ}と云^{マサニチ}と詮^{シテ}浅見^{マサニチ}と安土^{マサニチ}守れ
タリ淺見^{マサニチ}ハ生^{マサニチ}とえした友なり三井とハ日比中^{マサニチ}うべ不通^{マサニチ}
かれハ疑^シりれく三井がんどうう^{マサニチ}定^{マサニチ}三井惑^{マサニチ}古^{マサニチ}して沙汰^{マサニチ}
をうて人^ヒあくろと^{マサニチ}誹笑^{マサニチ}ふ人^ヒ多^{マサニチ}一^{マサニチ}防^{マサニチ}て聚樂^{マサニチ}の廣間^{マサニチ}奉行^{マサニチ}
列^{マサニチ}壁^{マサニチ}にて翟部淡路守^{マサニチ}をもて尋問^{マサニチ}淺見^{マサニチ}と生^{マサニチ}ハ年
うぬの知立^{マサニチ}なり三井とハ不通^{マサニチ}くに是^{マサニチ}非^{アラ}世の人^ヒ比評^{マサニチ}せん
事も迷惑^{マサニチ}たり他^ヒ人^ヒ仰付^{マサニチ}りまよと懲^{マサニチ}と^{マサニチ}懲^{マサニチ}と^{マサニチ}舌^{マサニチ}すばく中^{マサニチ}よが
ぬ三井^{マサニチ}が虚妄^{マサニチ}をりま心^{マサニチ}ようめハ理^{マサニチ}なれども證^{マサニチ}人^ヒひきとす

上ハ多くヤセと勧らざれどもた辞トヤに秀次坐て重て辭に
ぞくじとなくさきハ其時淺見今ハ已事をなじム武義比
論少も詐偽ムサド坂井が首ハ三井がこうとふすざれあく
又其もくたも比數少くニ生瀬ハ仁と存過トモトモヤとシ
されバ一坐孩てとかくソアレハこよトナリテ三井を赦く
賞せしム生瀬ハ秀次ト寵せしムのあゝ罪ニ及ばず右近ハ信
長の大将ナリ三井生瀬ハ松倉浅井両家の士キナリ沙アヒト
後京極高次ニ仕ヘテ大津ヲ拠ム武名体リツツミモ
○信長淺井善政をうつ明長政が木造の陣俄ニキナハシ
乞トテ猪子兵助を物見ニやらシテ又金松弥五左衛門を
も出ましテ猪子馬小白あひかをせく逃帰エ敵ハ引退ヒト

ソノももとく金松兼帰エ敵ヒトセヒトシヒスドニ又先はニ
ゆく鎗を合セテアリ信長後小二人を率テ汝等アラ不ハシ
小と問シテ猪子敵ハ弓つき馬を遙小遠くリのけひをど
ユ引退ヒトシテアラ金松承アラヌマハ猪子小國トヒキ
ましテ軍弦志ヒトセ改めをもくして空一々退ベシモアヒトセ
て戦リん為と存ドリヒヒトヤセトバ信長大ニシメルヒキ
○信長越前工攻入時朝倉義景二万計の兵にて刀根山と天
山とほどり林葉と伝長の先陣ひく居テ日信長井樓工
上ア欲をアリテ一敵ハ今夜必引退ヒトシテ先陣の老犬な
こくアヒト使を度キやりく下知せしム是を以て殿ハいそが
ハ仰ヒヤク敵大軍にて山工據エ地の利を得く且主我キ

バ往來日退びとあやしをうり夜入ても信長ハ松井捕
左の敵陣を睨で目もむれずして有るが夕の刻をうへすハ
や敵ハひくどとよもとらまに螺ふきにておせ馬と乗先陣
の大ぬき山はやつぢうがゆんとくふ旗本は者ども功名せよ
とてお一文字とすされば累々して先陣ハもぐれて信長の旗
をみて勝利を得らまぐり信長常とおもふる者甚大ぬき山と
てころりとまくとぞ

○上杉の奮戦上野北長野信濃守業正ハ在五中持業平の後
胤(イシ)なるとしるゝ世々上野等の藩より城ハ大名明神山の
尾(ササ)崎(ササキ)を以て城北郭(カハラ)より郭(カタラ)の形箕(ミ)れ手(フ)似(シテ)とて箕(ミ)
輪(リ)より上杉家衰(オトロ)れども權立(ノグリカ)して武威(ブシ)をぬくと信玄小

属せば信玄と攻めと五年終不一度もおくれをとらず
病(ヨリ)後二年を経て落城(ラクジヤシ)と

○元龜三年信玄參河遠江に軍を出し二股(スダク)の城をとり水
の手を少しきり切(カツ)て中根平左衛(カガラ)力の限(サ)えへられとも竟(カタマリ)か
かうで城落(スル)て信玄とまく箕(ミ)形原(ガハラ)と信玄すてをもじて水
松(シラカシ)ハ織田家の加勢もとと信玄すてをもじて水
トとておもへをもじて水(ミカタガハラ)と備(ミカタ)ニ行(ム)武者城(ヒサシ)とおも
せられ巴(ハラ)一戦(ム)及(シ)ばと備(ミカタ)ニ行(ム)有(ハラ)濱松(ハラ)の軍丘(ヒサシ)既(シテ)
井四郎左衛(セイザン)物見(モチミ)てをもゆう人(ヒナ)いの水(ミカタ)にも今日の序合(シテ)秋(ヒサシ)
然(シカ)るべ敵(ヒラ)ハ大軍(ヒラ)れど先陣(シテ)小使(セシダシ)をやり兵(ヒラ)をうちまをも

ウ一是非は一戦となしハ敵ちうまの乞へりやんまをもひく
からせうへとヤハ 東照宮^{モト}召汝^{モト}用^{モト}もつども其を思
タの物見スやもとふ仰^{モト}おくれと也目前^{モト}敵をもあくと
通^{モト}して生^{イキ}がひもなしと怒^{モト}らせま^{モト}四^{モト}方^{モト}左^{モト}右^{モト}あり日^{モト}あた
シテ小^{モト}勝敗^{ヨウハイ}利害^{リカイ}をばき^{モト}ハめてヤハヘ^{モト}津^{モト}敗^{モト}軍^{モト}をもろ
ト召^{モト}ほ^{モト}がりう^{モト}人^{モト}ハ殿^{モト}の清^{モト}心^{モト}も^{モト}ぐ^{モト}ま^{モト}く^{モト}狹^{モト}紋^{モト}の^{モト}な^{モト}をか
ね人^{モト}こそあくま^{モト}考^{モト}よと以^{モト}ての外^{モト}罵^{モト}で^{モト}そ^{モト}ば^{モト}と乘^{モト}出^{モト}成^{モト}津^{モト}
幕^{モト}を尋^{タマフ}功^{モト}名^{モト}をさうとす^{モト}即^{モト}をもあ^{モト}討^{モト}死^{モト}リ^{モト}く^{モト}う^{モト}も
味^{ミカヌガハラ}方^{モト}系^{モト}のち東^{モト}モ^{モト}け^{モト}を定^{モト}ら^{モト}成^{モト}瀬^{モト}と鳥^{モト}井^{モト}と先^{モト}後^{モト}
を争^{モト}玉^{モト}キ^{モト}既^{モト}又^{モト}刺^{モト}ち^{モト}ぐ^{モト}死^{モト}も^{モト}色^{モト}あ^{モト}いれ^{モト}を
かくの人^{モト}も^{モト}ま^{モト}ま^{モト}も^{モト}井^{モト}成^{モト}瀬^{モト}向^{モト}い^{モト}ひ^{モト}信^{モト}

まと一戦あるを^{モト}かたり^{モト}、織田^{モト}の援兵^{モト}も未^{モト}あ^{モト}士^{モト}二人
も大功^{モト}此時^{モト}あ^{モト}私^{モト}の争論^{モト}死^{モト}ん、不忠^{モト}も^{モト}二^{モト}人^{モト}
死^{モト}大死^{モト}して殿^{モト}損^{モト}う^{モト}も^{モト}ん^{モト}う^{モト}の軍^{モト}功名^{モト}く^{モト}
一^{モト}討^{モト}死^{モト}せん^{モト}成^{モト}瀬^{モト}と^{モト}ひ^{モト}じ^{モト}り^{モト}され^{モト}
哉^{モト}わまも左^{モト}こ^{モト}る^{モト}へ明日^{モト}討^{モト}死^{モト}せん^{モト}と^{モト}酒^{モト}も^{モト}だ^{モト}
深^{モト}更^{モト}及^{モト}び^{モト}東^{モト}照^{モト}宮^{モト}も^{モト}あ^{モト}せあ^{モト}り^{モト}成^{モト}瀬^{モト}ハ信長^{モト}
乃^{モト}加勢^{モト}の目付^{モト}と^{モト}あ^{モト}升^{モト}車^{モト}坂^{モト}向^{モト}べ^{モト}き^{モト}井^{モト}ハ岸^{モト}本^{モト}
先陳^{モト}の目付^{モト}と^{モト}あ^{モト}二^{モト}倍^{モト}先^{モト}かけ^{モト}二^{モト}万^{モト}作^{モト}敵^{モト}と^{モト}死^{モト}と^{モト}成^{モト}瀬^{モト}井^{モト}
曾^{モト}首^{モト}三^{モト}ツ^{モト}や^{モト}う^{モト}て成^{モト}瀬^{モト}も^{モト}首^{モト}三^{モト}う^{モト}り^{モト}て^{モト}あ^{モト}し^{モト}共^{モト}す^{モト}お^{モト}り^{モト}ひ^{モト}
首^{モト}を^{モト}ば^{モト}拋^{モト}と^{モト}又^{モト}か^{モト}け^{モト}向^{モト}と^{モト}牛^{モト}又^{モト}首^{モト}と^{モト}う^{モト}成^{モト}瀬^{モト}と^{モト}う^{モト}

只今山縣ヤマカタがほよか入カタハシムく討死トウシ敵アキシをもとまうとくモウトク
をゆて成瀬ナガセよ先サヘづサヘよ汝タハシと帰タバフて朋輩ボウハイよかカト
リへと從者ジミツヤシヤ少シテひすて信シムれ旗ハシモト本ハシモトを防カブへと背カムへんや
せシテ土屋チヤウ右衛ヨウエイづシテおシテともとくからカムアタマアタマを井イハナハナづシテ
坐シテ戸トドき剛カタの者モノ三尺ミツシル餘ハタチの野太刀ノハタチを打タケふり死タバフ
狂カニ切カツて廻ハラフ土屋チヤウが畠カスを破ハラフよシテけよと斬カツカツ小目メグロ眼メガネ
て馬ウマより落ハラフ多兵六ロクヒン四方シラタケより滄カツラギすシテよシテもシテ井イをうち
ゆくゆく敵アキシも味方ミカタもシテまぐシテて惜シカシシカシあり
渡邊半藏ワタナベハナツち綱モリウチもシテ拵ハセカり是ハシモトも味方ミカタ中ミハタチく危ハラハラく
先陣サヘをよシテ返カムせシテよシテんさシテくシテ壯士サウジラ等イシモカツからシテ
柴田シバタ七九郎ナナクニロウ大久保治オカボジ治ハシモトすシテよシテはシテひシテよ止シテ

之シテも入カタハシムべ甲斐ヤマハシの先陣サヘ小山田コヤタに向カタハシム足シタハシ狂カニをかくシテ軍始カタハシムく
先陣サヘ乱ミシテ起スルよシテなシテりシテされハ石川伯耆シロカワハクシ守ムサシ教カズマサ馬ウマより下シタハシづシテら
鎗ヨリを挽ハシム一足ヒツも引ハシムよシテ呼ハシム一陣シラタケの士卒シソツ各折ハシムまシテ滄カツラギ
すシテを仰ハシムり待ハシムけシテり甲斐ヤマハシの兵ヒツ競ハシムかシテは近ハシムとシテ引受ハシム
立ハシムあシテりをシテとシテ声シテをシテ追ハシムてシテ外トヤニ山サン小作コツツク一萬イチワツ滄カツラギ
を合ハシムせシテ日暮ハシムれば甲斐ヤマハシの大軍ヒツ進ハシムかシテ 東照宮ヒガラノミコト津
旗ハシモト本ハシモトをひシテあシテくシテ切カツてからシテせシテば遠ハシム江カタハシの山家ミカタフマニヤ三方ミシジ小山田
軍シウ衆シウ寡ハシモト支シテがシテ崩ハシムよシテらシテに柳シロ糸ヒダハ東ヒロのシテ西ヒヂ將ヒヨウ
向カタハシムて引退ハシムく伝長ヒタチヨウ比ヒコ侍ヒツ大將ヒツ平手ヒラハシ汎秀ヒツヒヂハシテあシテとシテ下ヒタチを返ハシム合ハシム
せ討死トウシ鳥井トリイ四郎ヨリロウ左シモ金カネを始ハシムとシテて河カワ淀ハシモト原ハラ即ヒヨウ長若川

紀伊守加藤二郎九郎才選兵三百餘人はまし敵もまくと追
來る本多肥ほち忠直後殿とく故近侍じどりて近遂小
討死を甲斐の士大將秋山伯耆守晴近透間あく追うけ
まく侍馬まくめく馬くならバ東照宮侍馬をひき
うへよせれす夏目次郎左衛門吉信ナレモ侍は死の時モハ
ハリヒトヤテ侍馬の口を濱松の方へひき向鎗をやく坐
侍馬のさんづをたゞくまきされば侍馬ひけぬ夜
目を止り多勢ヨミテされ滌れ柄のわく計上義と討
死を

夫夏目ハ浜松の侍畠守なり一ヶ矢倉^{ヤクマ}より軍械箱を貯めて
ヒビキだ地ありとく侍城^{カニ}守^{カニ}をまへとせんと告城下小

於ておまけあばいめら生て何ませんとく侍馬副の者ヨロ
をまれせと仰らまうと吉信侍馬の口もされととかく
下知一馬どう飛下ア侍譚をたゞくりへ討死仕^ハべ
とく侍馬に付^ハく畔柳助九郎以下知^ハて侍馬をほ株
の方ヨヒキむけとせ銃の柄少く侍馬のさんづがまき
取てそ^ハ十文字比鎧^ハて追^ハく敵を支て討死^ハく
ともソ^ハひしくと相あつまう様井の松平監物上^ハせの源井
三人^ハひしくと相あつまう前^ハ三河一向守一揆の時彼宗門を信す
將監大草才松平七郎もくみーくと中^ハも夏目次郎左
衛門一族もまくりりが彼宗門と徒黨^ハて已^ハが知れぬ
小要害口をかくんだてこもりと松平主殿助伊忠不^ハる

ヨアリセ木戸を打破て攻入バ夏目防ぎシテ帯藏の
中ニかゝれ入ム試殺すハ乾の中れ鳥を殺すに似テう坐
すまくこそと仰ミ主役うち殺して後ヤ兵をわざとひし
ゲノ入數を引シテ又夏目岡勝方をうねりかゝル仁
愛ぬれ殿ニ楯つモ一事の悔さよと其日より宗門の
本寺のやうと争ひて殿の席為ヨリのちばすてとなりまつれ
いのりぐるぶ果トテ義元をとげよう又一説より夏目大津
守右衛門伊織二部八千利等六千竹額田郡時田の字城
ス守として隣り小深澤の城より松平主兵助伊忠景を
攻ム乙部ハキトドリ一向宗ニ小まこと夏目と毎ニのあまき
孟を回ヘテアリテ一遂ヨアリモをうげ事と察

夏目をたすりん爲ヨ久留善四郎とねそくり伊忠ニ内通
一亭主をいへて半右衛門ハ針崎へおらひ夏目ハ藏乃
中小かくまくを乙部夏目を助けレヒト伊忠ニ乞ふ乙部
引キラウチ朋友をする事を伊忠怒ト夏目も又武功アリ老
友を乞ふ事を伊忠怒ト此旨をたゞきやられバ待教ゆ
タモ友田五郎ト一揆ヨクミセテヨリ試ば情一ノ兵より
出で伊忠ニはサクタムトソリ

水野左近大夫もひきほゞ支へまとも敵撃をそひがれば
又拂馬をひき返させ成る吉ち矣日下於久のあま小栗又
成る一揆切てニ落ト侍をとかくさせバ六騎ハ追モサム

大久保新十郎タツヨウロウ 石隣陣馬イシリニジマ のかゝるをもよもよと大久保十郎右衛タケヨウ 忠世ミツヨシ さしがかけのきこよ青旗シオヂ を打ハシル て敗軍ハイグン の味方ミカタ あつむアツム せりひ下ハシツ は淡松ハシタツ よりとくせうひ入り 敵城シキヨウ 近くあり まきば多居トリヤウ 多右モトヤウ はつ元忠モトタヂ 元黙モクバキ 口より討ハシル く去ハシム お敵ハシム は淡ハシタツ 藏兄弟シラタケイヂ 猛屋タケヤ 五兵衛ゴヒンエイ 櫻井庄サクラヰ みな名のりからして滌ハリ を入敵ハシム 五人討ハシル おりかゝる敵ハシム を追ハシム て石川伯耆イハラハキ 守モトヤシ と大久保七郎右衛タケヨウ と相ハシム て鉄炮テッパウ を打ちぐれようちよてきすれば ほもあホモア す敵ハシム を皆ハシム て味方ミカタツカ 疲ハシム てくらまふ 天地アメダ 三萬サンマツ 余ハシム 大久保七郎右衛タケヨウ と心ハシム を含ハシム せ敗軍ハイグン の中ハシム を求ハシム めく鉄炮テッパウ 只モト 十六挺テッピヤウ と引ハシム 具ハシム 一信ハシム え陣チエン さしがかけよ向ハシム てうちかハシム うば 甲斐カヘ 軍コ 夜合ガゼン 戦ハシム よりもうとあんてくとくをいどす 安案アシナ 内ナ

そあくどさいがかけへ落ハシム て若ハシム 其ハシム 敵ハシム をあくべ

又一說其ハシム 夜酒サカナ 井左衛イハシ 尾スカウ 扇タバタツ 次シカウ 今夜イマハ 武田タケダ の軍ヒサシ 疲ハシム 人ハシム 必定ハシム なり夜ハシム 討ハシム せんとハシム あすびハシム と出ハシム 一信ハシム え陣チエン おれ 樟カウ を見ハシム せくとハシム 小安コヤ は行ハシム けハシム いよハシム け旗ハタ の放ハシム ひまかハシム こよ此ハシム おれ旗ハタ を立ハシム てくとハシム ひなとハシム 忠次ハシム 実ハシム て疲ハシム まるる兵ヒサシ 後ハシム 陣チエン に退ハシム けに陣チエン を先ハシム づくからくとハシム 伝ハシム え慮オモイガ あめハシム てとハシム 表ハシム せしりくとハシム 後ハシム すすみハシム 小安コヤ 夜ハシム 信ハシム え士卒ヒサシ 一人ハシム 神ハシム ひれ若ハシム なづりハシム とくハシム そくハシム

夜ハシム あくとハシム 信ハシム え丘ハシム をかくハシム てあさくハシム 越ハシム 年ハシム あく是ハシム 元黙モクバキ え

年十二月廿二日遠州エシ 箕形原ミカタガハラ 軍コソヤシ 終ハシム て皆ハシム 淡松ハシタツ の城シキヨウ を攻ハシム 人ハシム といひりかハシム 信ハシム え

勝て曾の堵をあむとソシモトとて軍をかへされりは時
信長ハ白須賀・毛利河内守山中・瀧川伊豫・吉田・稻
葉伊豫守共・兵三万ありとておれよりり伝去勝ニ乗
て引どきてハ信長二万五千をひきみそり・セ毛利瀧川木
もさひもよしぬ所すてからだれらば必濱松よりも切く
出中小さりこもく軍せんと吉田より岐阜まで一里少一人ろ
ちせびの者をおりて往まくる小信をひきせられよまも
信長の謀やくくなりふ

○味方系北軍・甲斐の兵もぐれく追かれり一ツバ
東照宮口義じとかく侍馬を焼く大久保五郎右衛門忠
次手負て歩ぎちよならう・スガマ菱沼義定吉上
サタヨシ説をかくれと

忠次を馬の前輪のせて退くと後は芦沼・長光の
刀を賜り・賞せきをもて菅沼又引込て追く敵を
防ぐり天野康景・長坂源次・布坂義又十郎等もぬくよ
卫と防戦・小久保相摸守忠勝タタキカ・サカミ此時おもと射タタキまき歩ぎちよ
益て危ぐりとゆ覽して小栗忠藏・久次ヒサツク・オオ十郎等と称す・サカミ小新十郎
こう武者ありられ助けよと仰られ一久次ヒサツク・オ馬の心隣を
抱きのまゝ退く敵透間なく追はえをりる武者あり
多く城壁中三ス郎重次等合せて討とうればほ・信國北
刀を賜り・タタキ畔柳助九郎・津馬のかくをもなれど後は金の
扇を拂りて走せきを努力するに故も走く追はえをり
玉水豊太郎也ふくとあく防戦とて歩ぎて又歩馬

を引返さる成瀬吉右衛門一ハ兄が最後ニ汝ハ此あすりは
案内よくあれど拂供にて悪かく引とせ奉るふと云ふ
アリバ拂側につきまう一が引五て敵を退かすとケ銃
浜松の城入らせき鳥居彦左衛門元忠ニ拂下知に付てま
黙口の拂門をひそみて引ゆる兵入せらるまと敵をも
來るもわがこゝる城よたやとく付入るをや門を閉じて
かう大を所ふたゞベーと仰らる此日ハ天暁雲ア雪をちりと
まよは甚一拂供して馬より下立城中に入ん、松平ハ
弟三郎康定松平阵九郎景忠平岩七助親吉大久保忠
隣茨沼宣吉都築惣左衛門秀調等あり都築妻粥を持
せ来アテ拂供の人ふくもあゝ後衣服を脱アテ賣

美うり今日敵の跡をふんで戦ひ猶べきよ味方をもと
て心なきを敗軍ノロ惜も半なりと仰あを湯つて後
を侍女久野きりをバ三度かへまよひ止まつれりとく
拂枕をかくすられびきかきて拂睡り山縣城近く攻
トセ門比雇をまつま暇なしと竟よりいふ攻入ぢやとよ
を馬場美濃守笠て打たけりとすれば門をとら櫓を
も引びたま左ハかくかく火白日めり一謀あべさ
うからく一攻ベク徳川殿ハ海道一の弓とくたまよ
見届てととて猶豫一々城中より鳥居彦右衛門
渡を半藏同半十郎橋井莊ミ助勝至甚五を傷を始と
てくまうの剛者とも百餘人突て出一バ甲斐の丘

口を引退て攻^吉び下^サり、余りの百騎入突^ト出^ス。一ノ門

城^{シテ}牛齋^{ウザイ}田^タも牛齋^{ウザイ}井^イ並^ミ娘^{ムネ}相^シ公^{コウ}喜^ヒ王^ウ御^ミ子^チ

興^{アキ}福^ルと^シおも^トか^ク敵^{シテ}斬^ス一^ヒと^シ之^シ女^メ中^シ大^カ小^コ皇^ウ孫^ス也^ハ。

大^カ小^コ也^ハ攻^シ之^シ對^シ斬^ス也^ハ。

常山紀談卷之三終

